

## 7月7日 年間第14主日

イザ 66:10～14c ガラ 6:14～18 ルカ 10:1-12,17-20

### 1. ルカ

v.9 「“神の国はあなたがたに近づいた”と言いなさい。」

新約聖書が語っている宣教とは、イエス・キリストの死と復活によって開始され、今やその完成の日が近づいている“終末的な神の支配”を宣べ伝えることであります。9章にある12人の派遣の話に加えて、ルカ福音書はここで72人の派遣を述べていますが、その目的は同じであって、“神の国は近づいた”という使信を広く伝えることであります。

新約聖書がその読者に、「悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15)、「悔い改め、洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」(使 2:38)、「主イエスを信じなさい」(使 16:31)という使信を伝えるとき、それはすべて“神の国は近づいた”ということをも前提にした宣教なのだということを、よく理解する必要があります。

教会憲章は次のように述べています。「キリストは・・・地上に天の国を開始し・・・た。教会、すなわち秘義としてすでに現存するキリストの国は、神の力によって、世界において可視的に成長する。」(3) 「それはさらに、世の終わりに栄光のうちに完成されるであろう。」(2) 「教会は、神の国の地上における芽生えと開始となっている。教会は徐々に発展するが、その間にも神の国の完成を渴望し、栄光のうちに自分の王と結ばれることを全力をもって望み求めている。」(5)

新約聖書によれば、宣教とは、終末的な神の国を「前もって味わい、これに参加する」(典礼憲章 8)ための行為であって、ミサはキリストの血による新しい契約の記念(1コリ 11:25)であります。それ故、この宣教を受け入れない町は、神の裁きを逃れることは出来ないと知らなければなりません(v.11)。今朝の朗読配分からは、この裁きを語る部分が省略されていますが(10:13-16、イザ 66:14d)、さらに深く学ぶ意欲のある人は心に留めるべき部分でしょう。

それよりもむしろ、真面目で教養あるキリスト者は、現代の司教や司祭の説教がほとんど全く“神の国は近づいた”という使信を伝えていないことを、前向きに批判すべきではないでしょうか。率直に言って、私たちのミサの説教によって「サタンが稲妻のように天から落ちるのを」、天上のイエスが見ておられるだろうか、はなはだ疑問に思えるからです。そのような司教や司祭を生み出したのは、他ならぬ私たちの共同体であることを思い起こして、真剣に主のあわれみと助けを願おうではありませんか。私たち現代の信者一人一人こそが、“悔い改めて福音を信じ”るようと、今朝呼びかけられているのです。

### 2. イザ

今朝の朗読聖書によれば、v.14が一部を省略されて次のようになっています。「主の御手は僕たちと共にあることが、こうして示される。」

第三イザヤと呼ばれる56-66章の特色は、救済預言と審判預言とが相互に絡んで混在していることです。捕囚から帰還した民の困窮と失望が、神の都を再建される神への希望の使信と共に語られる中で、預言者は歴史の両面としての救済と審判を同時に告知しました。

カトリック教会が、ミサの朗読配分によって、救済預言である“神の国の福音”を伝えようとしているのは、復活の主による宣教命令(マコ16:15-16)に應えるためであることを、感謝のうちに理解しましょう。

### 3. ガラ

v.15 「大切なのは、新しく創造されることです。」

これは、ガラテヤの信徒への手紙全体の結論であって、“神の国の福音”を受け入れる人にとっての中心主題であります。どうか、このテキストだけを切り離して、自己流に解釈しないでください。今朝の朗読部分は、ガラテヤの信徒への手紙全体を十分に咀嚼して初めて納得出来る箇所なのです。

そして、その理解を補う別の表現を、私たちは同じ使徒パウロの書いたⅡコリ5:17-21でも見出します。「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、……」「つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、……」「わたしたちは …… キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。」

私たちのミサの中で、司祭の語る説教がいつもこのような説教となるように、祈ろうではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。

## 7月14日 年間第15主日

申 30:10～14    コロ 1:15～20    ルカ 10:25～37

### 1. ルカ

v.25 「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」

この質問は 18:18 にも登場するのですが、それがだれよりもキリスト者である私たちにとってこそ、かけがえのない質問であることを、先ず理解しましょう。これはテレビのクイズ番組の質問ではないのです。この質問への正しい答えを得るのでなければ、人は救いを確信して、生涯信仰を貫き通すことが出来ないからです。ただ議論しているだけではだめだという痛烈なイエスの叱責が、このテキストを通して聞こえて来るようではありませんか。

マタ 19:17 には、「もし命を得たいのなら、掟を守りなさい」というイエスの言葉が記録されています。聖書が伝えるキリストの福音すなわち“神のことば”は、信仰者の共同体である教会に向けられているのだという、いわば当然のことが明確にされなければなりません。自分は昔まるで勉強が出来なかつたくせに、親になった途端に子供を塾にでも通わせれば成績優秀な生徒になると錯覚するようなことが、教会にもあるのです。カトリックの信者になってからの年数が長くなると、“相変わらず肉の人”“ただの人”(1コリ3:3)のままでありながら、一人前の気分になってしまって、「それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」(v.28)と言われて初めて、実は自分が“神のことば”に生きていないという事実に気付かされるのです。

“主を愛し、隣人を愛する”(v.27)ということが、しばしば“教会を愛し、ミサを愛する”という意味では理解されなくて、日常の生活で“善意の人”として振る舞うことに置き換えられてしまうのを、私たちは見て来ました。この“善いサマリア人の物語り”が、そのように偏って解釈されることの何と多かつたことでしょうか。あなたの第一の隣人は、共にミサをささげる兄弟姉妹ではないのですか?(エフェ 4:25 参照)。

私は以前にも指摘したことがあります。カトリック教会は典礼刷新によって、昔は“聖体拝領”と呼ばれていたミサの部分を“交わりの儀”と改称しました。“わたしたちが主との交わりとわたしたち相互の交わりにまで高められる聖体の秘跡”(カトリック教会のカテキズム 789)をこそ指して、主は鋭く、「行って、なとも同じようにしなさい」(v.37)と言っておられるのです。

### 2. コロ

v.18 「また、御子はその体である教会の頭です。…… こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。」

この第一の者を頭にいただいている“教会”が、“救いのために必要である”と、“聖書と聖伝に基づいて”カトリック教会は教えます(教会憲章 14)。それは教会が、“神が、光の中にある聖なる者たちの相続分にあずかれるようにしてくださった”(1:12)者たちの共同体だからです。神は御子の十字架の血によって平

和を打ち立て(v.20)、私たちキリスト者を「御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。」(1:22)

ですから、典礼聖歌 28 の答唱に使われている 詩 137:5-6 は、私たちにとっては教会の賛歌なのです。

“教会よ”、もしも、わたしがあなたを忘れるなら、

わたしの右手は萎えるがよい。

わたしの舌は上顎に張り付くがよい、もしも、あなたを思わぬときがあるなら、

もしも、“教会を”わたしの最大の喜びとしないなら。

### 3. 申

「戒めと掟」(v.10)という表現から、しばしば人は戒律や道徳律のようなものを連想しますが、申命記はこの箇所を「御言葉」と呼び換えています(v.14)。そして使徒パウロはこれを引用して、さらに「信仰の言葉」と言い換えました(ロマ 10:8)。それは“十字架の福音”(I コリ 1:18)であり、“和解の福音”(II コリ 5:19、コロ 1:22)に他なりません。

この御言葉は、神の民である私たちキリスト者の“ごく近くにあり、口と心にある”(v.14)べきものであって、これを繰り返し読み、学び、理解し、“家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも”(申 6:7)心に留めることが、“主を愛し、隣人を愛する”(ルカ 10:27)ことと決して切り離せない関係にあることを、現代のキリスト者は知らなければなりません(申 6:4-9 参照)。

庭に撒いたパンくずに群がる雀たちの中に、初めて親に連れられて来た小雀がいて、目の前に餌があっても自分では啄まないで親鳥に食べさせてもらっていることがありますが、一日経って次の日になると、もう自分で餌を啄むように成長するものです。そのように、カトリック教会の信者も明日には、自分で聖書を読み自分で学ぶ一人前の信仰者に成長しなければならないのは当然のことです。普通の人なら、聖書全巻を一通り読むのに、一年以上もかかったりはしないでしょう。それは決して「難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない」(v.11)ことを、各自の体験を通して実際に感謝出来るようになるうではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。

## 7月21日 年間第16主日

創 18:1～10a    コロ 1:24～28    ルカ 10:38～42

### 1. ルカ

v.39 「マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。」

ルカ福音書にだけ伝えられているこのマルタとマリアの物語りは、非常に印象深く、そして分かり易い話なので、多くの人々によく知られています。それでは実際に、多くのキリスト信者たちがマリアのように“良い方を選んで”(v.42)いるかということ、その可能性は必ずしも大きくはないのです。

何よりもまず、「その話」とは私たちにとって何であるかを、正しく理解している人が少ないことがあげられます。キリストに聞く、キリストの御言葉に聞くとは、キリストの福音を聞くことです(ロマ 10:17)。それはⅡコリ 1:18で「十字架の言葉」と呼ばれているものであって、キリストはその死と復活によって私たちのために永遠の贖いを成し遂げられました(ヘブ 9:12)。「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」(エフェ 1:7) そして永遠の命の希望を与えられたのです(ロマ 5:2、コロ 1:23)。しかしこの福音を正しく聞き、理解し、信じている人が決して多くはないのです。

次に、教会では司祭だけでなく信者たちが皆、「多くのことに思い悩み、心を乱して」(v.41)忙しくしているという現実があります。人間は何かで忙しくしているときには、それなりの充足感があるもので、仕事にせよ趣味や娯楽にせよ、私たちはそこで幾分かの生き甲斐や満足を得て生活しています。しかしそれが、“神のことは” “キリストの福音” を聞くことの大切さを、信者に忘れさせているような傾向があるのです。

マリアは、姉がせわしく立ち働いていることを十分承知の上で、あえて、わざわざ、主の足もとに座って福音に聞き入るといった選択をしたのだと、この物語りは言おうとしていることを理解しましょう。

### 2. コロ

v.25 「神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、……」

使徒パウロは神の福音、すなわち「秘められた計画」(v.26)を宣べ伝えるために“苦勞し、闘って”(1:29)いましたが、それはキリストの苦しみに与ることだという理解を持っていました(フィリ 1:29-30 参照)。v.24もそのような理解の線上で語られたものと思われます。

v.27 「その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。」

これは 1:3-23 で述べたことの要約であって、それが十分理解されていないと、何のことだか分からなくなってしまいます。それは エフェ 1:3-14, 3:1-13 でも説明されていて、福音とほぼ同義語のように使われています(ロマ 16:25 参照)。私たち信者は、“この秘められた計画が … どれほど栄光に満ちたものであるかを”(v.27)理解することが大切で、この福音の希望から離れないように(1:23)しなければなりません。

ここで信者の皆様に、私からの助言をお伝えしておきたいと思います。主日のミサの朗読配分は、それ

だけを独立した神の言葉の“断片”のように思ってならないということです。前後関係から切り離された聖書の断片は、それだけでは“神のことば”としては働き得ず、人間の勝手な主張に都合よく利用されることの方が多いからです。残念なことに、主日に当番でミサの朗読奉仕をする人が、自分でも意味が分からず、生気のない棒読みでお茶を濁すことが多いのも、結局は“断片”としてしか読んでいないからです。聖書を学んで“神のことば”を聞くことと、ただ“断片”をあれこれ読んで雑多な知識を増やすこととは、似て非なることなのです。どうか“神のことば”に“聞き入る”信者になるようにしてください。

### 3. 創

v.3 「…… どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。」

旧約聖書を繰り返し読んでみると、イスラエルの長い歴史の中で語り継がれて来た深い信仰的思索の数々に出会います。この食事をもてなすアブラハムの物語りが、神のことば、すなわち神の約束(ロマ4:13)を聞く熱意をどれほど強調して述べているかに気付くと、私たちは驚きを感じないではいられなくなります。スーパーで食材を買って来て調理するのは違って、パンを焼くために小麦粉をこね、肉料理を作るために子牛の解体から始めるという途方もない大仕事が、ただ神への熱意のためにだけ描かれているのです。

そのような熱心が、キリストの福音を聞くために、教会には必要なのです。主の足もとに座っているマリアは、絵画の中に描かれた慎ましい婦人像でも、また敬虔や美徳の象徴でもなくて、私たちに“神のことば”を聞く熱意を促す「キリストの使者」(IIコリ5:20)の一人なのです。

アーメン、ハレルヤ。

## 7月28日 年間第17主日

創 18:20～32 コロ 2:12～14 ルカ 11:1～13

### 1. ルカ

v.2 「父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。」

今年は信仰年でありますので、今朝はカトリック教会のカテキズムにおける解説を一つの手掛かりにして、“主の祈り”について学んでみましょう。カテキズム2759は先ず、マタイとルカによる二種類の伝承について説明し、カテキズム2760で、これがかなり早い時期から典礼の場で唱えられて来たという伝承形態に言及しています。

教会では、神を「父よ」と呼ぶことは基本的に、信仰と悔い改めによって洗礼に与り、「神の子とする霊を受けた」(ロマ8:15)人々の特権であると考えられて来ました。これはこの世の人々が漠然と、神は全人類の父であると考えのとは、全く次元の違うことなのです。カテキズム2769には、「洗礼と堅信においては、主の祈りの伝授が神聖のいのちへの新たな誕生を意味します」、「したがって、教父たちによる“主の祈り”の解説の大部分は、洗礼志願者と新信者とに向けられたものとなっています」という記載があります。

日本のカトリック教会儀式書“成人のキリスト教入信式”は三つの段階を設けていて、第一段階の入門式で主の祈りの授与が行われ、「この祈りは古代から、神の子どもとされた人々の祈りであって、将来、感謝の祭儀で信者と共に唱えるものである」という解説が付されています。そして第二段階の洗礼志願式で信条の授与が行われ、このような準備を経て第三段階の入信の秘跡の祭儀に至ります。

このような信者の祈りであって、典礼の場で唱えられて来た“主の祈り”の本質である終末的性格(カテキズム2788, 2817)に、特に注意を喚起しなければなりません。なぜならそれこそが、私たちのミサで拝領に先立って“主の祈り”を会衆一同が唱える根拠であるからです。

v.13 「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

罪人の群である私たちに「父よ」と祈ることが許されているのは、復活のキリストが聖霊を通して「執り成してくださる」(ロマ8:27,34)からであることを、感謝しましょう。

### 2. コロ

v.12 「洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです。」

神の秘められた計画(1:26)という福音の終末的使信が聖なる者たちの間に十分に理解され、実を結んで成長している(1:6)という、初代教会の背景の下でこそ理解出来るこの“新生の恵み”(IIコリ5:17, ヨハ3:5 参照)を、現代のカトリック信者は聖書を通して学ばなければなりません。「実際、聖書を知らないことは、キリストを知らないことである。」(神の啓示に関する教義憲章 25) 換言すれば、聖書を知らないことは、受

けた救いの何たるかを知らないことであり、“父よ”と祈ることの意味を知らないことなのです。

### 3. 創

この朗読テキストが、福音書のテキストと共通する“気を落とさずに絶えず祈る”(ルカ 18:1)という主題によって、今朝のミサのために配分されていることは容易に理解出来ることです。しかし、もし私たちが正しく聖書を学びたいと願うなら、このテキストが vv.17-19 を前提にしていることを見落としてはなりません。

いったいキリスト教の祈りは、労働組合による労使交渉や、デモによる民衆の要求、個人や団体による意見の表明などと同じ線上で理解してはならないものです。“絶えず祈る”“熱心に祈る”ということが、それら世俗の交渉におけるように、発言力を高めて有利に事を運ぶことのように誤解される可能性が大きいからです。日本の祭りにおける御輿(おみこし)担ぎが、大いに揺すって脅して神に言うことを聞かせるという由来によることは、よく知られています。

プロテスタントの教派の中には、このような傾向の強いものがたくさんあります。近年はカトリック教会でも、個人による自由祈禱が行われる機会が増えて来て、安易に神に対して勝手な要求を突きつけるような祈り方が散見されます。歴史的に自由祈禱の習慣があまり無かったカトリック教会で、信徒だけでなく司祭も、祈りの訓練とほとんど無縁であったという弱点が、私にはかなり目立つように思えます。

“聖書と典礼”には、公式祈願が二種類掲載されていて、伝統的性格の濃い“各年共通用”と、現代感覚で作成されたと思われる“試用”とがありますが、この二種類は、祈りに対する神学的理解がかなり大きく異なっているのです。ですからその選択は、無自覚に行われるべきではありません。

“アブラハムの子孫”(18:19)とは、キリストを指して(ガラ 3:16)、“祝福に入るすべての国民”(18:18)とは教会のことである(ロマ 4:16、ガラ 3:29)と、使徒パウロは説明しています。そのような“わたしたち教会すべての父”(ガラ 4:16)であるアブラハムと、主は救済史のご計画について、かくも恵み深く語り合ってください(18:33)のです。今朝の旧約の朗読テキストを、そのような前後関係の中で理解することによって、現代のカトリック教会の信徒たちと司祭たちの祈りが“よい神との対話”に成長しますように。

アーメン、ハレルヤ。